

**ナポレオンの率いるフランス軍のエジプト侵攻** 1798年~99年

- 1) ナポレオンの【1: 】の目的は、イギリスのインドとの最短輸送路を断ち、イギリスのインド経営を妨害し、あわよくばインドを奪取すること。
- 2) 当時のエジプトは24の県を知事として支配する【2: 】の有力者によって実質上支配されていた。  
マムルークとは、アッバース朝の9世紀半ばに遊牧騎馬民族（トルコ人）の奴隸軍人から採用された騎兵のことである。
- 3) 1798年7月3日、アブキール港に上陸したフランス軍は翌日にはアレクサンドリアを占領。7月21日にカイロ近郊のナイル川河畔で、1500騎のマムルーク軍を打ち破った。これが【3: 】である。  
「兵士諸君、4000年の歴史が見下ろしている」という言葉は有名であるが、その場で言ったかどうかは疑問である。7月25日、ナポレオンはカイロに入城、上陸からわずか3週間でエジプト征服をほぼ完了した。これが、「西洋の衝撃」であり、エジプトを近代化に向かわせた。
- 4) オスマン帝国はフランスに対して宣戦布告。第二次対仏大同盟にも参加。8月1日に、ホレーショ=ネルソン率いる大英帝国地中海艦隊がアブキールを守っていたフランスの艦隊を殲滅した。これを【4: 】と言う。フランス軍は補給と退路を断たれ、マムルークたちの抵抗はつづいた。
- 5) 1799年、第2回対仏大同盟を締結したイギリス・オーストリアがフランス本国に対する攻撃を再開、ナポレオンは作戦継続を断念、アブキールの陸戦でオスマン軍を撃退した後の8月22日、少数の側近とともにひそかに帰国した。補給を絶たれ疫病に苦しむ残兵1万5000人は、1801年、イギリス・オスマン帝国に降伏、帰国した。
- 6) ナポレオンはエジプトへの遠征に167名の科学者や建築技術者からなる学術調査団を同行させた。調査団の最も有名な業績は【5: 】の発見である。上かみエジプト（ナイル川上流域のエジプト）に赴いた一団はルクソールのカルナック神殿や王家の谷を世界で初めて学術的に記録した。これらの業績は後に『エジプト誌』にまとめられた。

**帝国建設をめざしたムハンマド=アリー** 1769-1849

マケドニア生まれ（確実）。アルバニア人（多数説）。

- 1) 生い立ちに興味深い割愛。オスマン帝国の命でバルカン半島からエジプトに派遣されたアルバニア人不正規軍の副隊長（仏軍撤退の1801年には副司令官に出世）として、フランス軍と戦った。
- 2) 1803年、イギリス軍の撤収で、たちまちオスマン帝国軍はエジプトの主導権を巡る内紛を起した。【6: 】はアルバニア人不正規軍の司令官となり、当時のエジプト総督とマムルークを次々に破って混乱を收拾し、1805年にカイロのウラマー（宗教指導者）、市民による推挙という手続きをとって自ら【7: 】（ワーリー）に就任することを宣言した。
- 3) オスマン帝国の【8: 】はムハンマド=アリーの実力を認めざるを得ず、1805年、前任の総督の罷免、ムハンマド=アリーの総督就任とパシャの称号授与を勅許した。これにより、ムハンマド=アリーは名実ともにエジプトの支配者としての第一歩を踏み出し、エジプトは事実上独立し近代化をめざした。
- 4) マムルークたちは、イギリスと結び彼を牽制しようとした。1807年、上陸を敢行したイギリス軍はエジプト軍に大敗を喫した。この戦いの結果、1809年までに全てのマムルークがムハンマド=アリーに屈服した。有力なマムルークたちは服従の証としてカイロへ移住させられた。1811年3月11日、ムハンマド=アリーは式典を名目としてマムルークたち500名をカイロのシタデル（城塞）に招き、その帰路にシタデルからカイロの町に降りる途中の隘路で挟撃・虐殺し、降服したものを斬首するという強硬手段でマムルークを一掃した。これにより過去300年間確立しなかったエジプト全域に対する総督の支配が実現した。1818年、マフムト2世の命により、ワッハーブ王国を滅ぼした。1821年、ギリシア独立戦争鎮圧のため出兵。
- 5) ムハンマド=アリーは、【9: 】を実行した。  
①徴兵制度、徴税制度を確立した。②近代的な教育制度、近代的な工場を建設した。③輸入を抑制し、小麦、【10: 】などの農業生産物を国家の独占のもとに輸出した（専売制）。殊に【10】には力を注ぎモノカルチャー化した。アメリカ南北戦争(1861-65)中は綿花の国際価格高騰で好景気に沸いたが戦後の暴落で大打撃を受けた。  
後掲ムハンマド=アリー朝の繁栄と挫折の(2)参照
- 6) ムハンマド=アリーは、西欧諸国にならって植民地の獲得をめざし、「ナイル河谷はすべてエジプト領である」とし、1821年、【11: 】に軍を送り占領したほか、後掲(7)(8)の戦争を戦った。  
スーダンは長年エジプト・イギリスの共同統治下にあった。ここで起きた事件で重要なのはマフディーの乱(1881-98)、ファショダ事件(1898)である。1956年スーダンは面積でアフリカ最大の国家として独立した。2011年、南スーダンが分離独立した。南北スーダンの国境線はアフリカ人自身が決めた初めての国境線である。
- 7) 第1回エジプト・トルコ戦争 1831-33  
【12: 】独立戦争鎮圧のため出兵した見返りに、オスマン帝国に対し【13: 】の領有を要求。宗主国オスマン帝国と開戦し、シリアを占領。イギリス・フランス・オーストリアがオスマン帝国に干渉しエジプトとを和解させ、ムハンマド=アリーにシリア統治権を与えた(1833 キュタヒア条約)。オスマン帝国は同年ロシア帝国とウンキヤルスケレッシ条約を結び支援を受けた。№130「クリミア戦争と東方問題」で詳しく述べた。ここではエジプト側から見ている。
- 8) 第2回エジプト・トルコ戦争 1839-40 老境に入ったムハンマド=アリーは、エジプト・シリアの総督世襲権を、オスマン帝国に要求。オスマン帝国側から開戦、シリアに出兵。ムハンマド=アリーはフランスの支援を受けて勝利したが、イギリス・オーストリア・プロイセン 11M が干渉し、1840年の【14: 】で、このように決定された。  
《ムハンマド=アリーのエジプトとスーダンの総督世襲権を認める。ただし、シリアは放棄せよ。軍備は縮小する》  
ムハンマド=アリーはこれによってエジプトに押し込められた。また【14】は、極端な不平等条約であるトルコ=イギリス通商条約(1838)をエジプトにも適用することを規定しており（実際の適用は1840年）、エジプトは大打撃を受ける。

## ムハンマド=アリー朝の繁栄と挫折

第2回エジプト・トルコ戦争はムハンマド=アリーの政治的敗北に終わったが、エジプトはオスマン帝国からの政治的自立とエジプト・スーダンの総督世襲権を承認され、彼とその子孫は20世紀半ばの共和政成立までの約150年間エジプトを支配した。これをムハンマド=アリー朝と言う。厳密には王朝ではないという判断から「ムハンマド=アリーとその子孫による統治」と表現している教科書もある。近代の独立エジプト国家の礎はこの時期に開かれたことは確かである。

支配者の称号は初代はオスマン帝国総督、第5代以降は副王、第8代はスルタン、第9代以降は国王である。

- 1) ムハンマド=アリーは、近代化政策を推進した。  
鉄道、電信網の建設、土地改革の実施 など  
これらは、農民の大きな負担によるもの・・・外国の資本に頼らない近代化の試みとしては貴重。  
エジプト人という国民意識が形成されたのはこの時期。
- 2) 国際法的には「オスマン帝国の属州である」ことに変わりはないエジプト  
1838年に、オスマン帝国がイギリスと結んだ【15: 】という不平等条約（低関税による自由貿易）がロンドン会議(1840)以降エジプトにも適用された。その結果こうなった。もちろんオスマン帝国全体も財政困難になった。  
①国家財政を潤してきた、得意の農産物の専売制が崩壊！政府収入大幅ダウン！  
②関税障壁で守られてきたハイコストの国営工場は次々と閉鎖に追い込まれ、政府収入大幅ダウン！  
スエズ運河を建設する以前から国家財政は苦しかった。
- 3) 結論を言えば、ムハンマド=アリーは、近代国家建設という大望実現に失敗した。  
ヨーロッパ列強も政治的・軍事的に重要なエジプトが独力で近代化することを望まなかった。ムハンマド=アリーはオスマン帝国とヨーロッパ列強の干渉という2つの壁を乗り越えることはできなかった。  
1840年の戦争終結後はオスマン帝国や列強との関係が修復され、政治的には相対的安定期に入った。1847年、ムハンマド=アリーは高齢を理由に政治の実権を長男のイブラーヒム=パシャに譲ったが、翌年、長男は病没し、孫のアッバース=パシャが即位した。失意と老衰によって衰弱したムハンマド=アリーは自邸内に閉じこもり、1849年8月に没した。遺骸はカイロのシタデルの丘に運ばれ、生前建設されたムハンマド=アリー・モスクに葬られた。ムハンマド=アリー朝は1805年から1952年まで続いたが、19世紀後半からは実質的にイギリスの支配下にあった。
- 4) ムハンマド=アリー亡き後(1849没)も、エジプトは発展を続けた。大土地所有制の下で灌漑工事が行われ綿花栽培が発達。首都カイロ、アレクサンドリア、スエズ間には鉄道も敷設された。しかし、アメリカ南北戦争の終結とともに綿花の国際価格は暴落し、1862年以降は外債を発行するに至った。1869年には【16: 】が開通したが、莫大な建設費で国家財政は破綻した。  
国際スエズ運河会社のフランス人【17: 】(外交官)の技術と約10万人のエジプト人労働者の犠牲の上に完成した。着工は1859年、10年間を要した難工事は、1869年竣工。アメリカの大陸横断鉄道開通(同じ1869年)とともに「世界を狭くした」と評価される。スエズ運河会社の株はエジプトとフランスが所有した。
- 5) 莫大な債務をかかえたエジプトは、実質1860年代からイギリス・フランスの財務管理下に置かれた。
- 6) エジプト政府は、1875年、スエズ運河会社の持株をイギリスに売却した。この時の英首相はディズレーリ。1876年以降、国家財政は、正式に【18: 】とフランスの管理下に置かれた。
- 7) 1881~82年には【19: 】と呼ばれる国民的な抵抗運動が起きた。エジプト陸軍将校のアフマド=ウラービー大佐が反乱を起こし、政権を掌握した。彼は高位軍人の称号をつけて「ウラービー=パシャ」とも呼ぶ。ウラービーはオラービーとも読むので、「オラービーの反乱」と呼ぶ例もある。  
①スローガンは【20: 】(外国支配の強化に反対)→その後もエジプト民族運動の原点となる。  
②背景に、立憲制の確立、議会の開設を求める民衆運動があった。(同時期の自由民権運動とも共通点あり)  
パン=イスラーム主義の提唱者アフガーニーの影響を受けたムハンマド=アブドゥフもこの運動に参加していた。スーダンのマフディーの反乱の指導者ムハンマド=アフマドとの混同に注意せよ。
- 7) 反乱の2年目、1882年、イギリスが単独出兵、エジプトを軍事占領、エジプトを保護下においた。目的は、エジプト自体の支配とインドへの最短輸送路確保。この時のイギリス首相は「恥ずべき戦争」とアヘン戦争には反対したグラッドストーン(第2次)である。これ以降、エジプトはイギリスの保護国となった(正式には1914年以降)。なお、1922~52年は、「エジプト王国」として形式上は自立していた。  
ムスタファ=カーミル 1874-1908 はオラービーの精神を受け継ぎ、国民党を組織、完全独立を要求しつづけた。

## 2009東洋大学(抜粋・改作)

正解 問1 ① 問2 B ④ C ① D ③

19世紀のはじめ、オスマン帝国の属領であったエジプトでは進入してきた【A】軍を撃退したあと、【B】がエジプト総督となり、近代化策をすすめた。さらにスーダンに軍を送り、そこを征服し、またシリアの領有をめぐる2度にわたってオスマン帝国と争った。しかしヨーロッパ列強は、エジプトが巨大になることをおそれて介入し、1840年の戦争処理のための列強会議でシリアの放棄、軍備の縮小を強制した。その後エジプトは土地改革などの近代化政策を推し進め、1869年にはスエズ運河を開削した。しかし運河開削の経費などのために国家財政は破綻し、75年にスエズ運河会社の株をイギリスに売却して管理権を譲渡した。その後、軍人の【C】が「エジプト人のためのエジプト」をスローガンにした民族運動をおこしたが、結果的にイギリスの保護国となった。【D】たちは国民党を組織して完全独立を目指す運動を行った。

- 問1 空欄【A】に入る国名 ① フランス ② オーストリア ③ プロイセン ④ イギリス ⑤ スペイン  
問2 空欄【B】～【D】に入る人名 ① ウラービー=パシャ ② ムハンマド=アフマド ③ ムスタファ=カーミル  
④ ムハンマド=アリー ⑤ ミドハト=パシャ